

溶連菌感染症について

溶連菌の正式名称は、A群B溶血性連鎖球菌です。この菌が、咽頭（のど）で繁殖して咽頭炎や扁桃炎を起こした状態が、溶連菌感染症と言われているものです。溶連菌は、咽頭炎、扁桃炎以外にも「とびひ」や「蜂巣織炎（あちこちの皮膚のひどい化膿）」なども起こすことがあります。

この溶連菌感染症の症状は、突然の発熱（39℃～40℃くらいになることが多い）と全身倦怠感、咽頭痛がみられ、腹痛、嘔吐、頭痛もあります。1～2mm程度の少し膨らんだ赤みがあり、痒みも強い発疹が出ることもあり、発疹だけで気づくこともあります。その他の症状では、舌が赤くなりイチゴの表面のようにザラザラしてくる、耳の下からくびにかけての当たりのリンパ節が腫れてくる、球結膜（しろめ）が赤くなるなどがあります。

治療は、抗生物質の内服で、熱や発疹などには良く効きます。ただし、症状が良くなったからと抗生物質の服用をやめると、ぶり返すことが多く、最低でも10日以上は服用した方がいいでしょう。抗生物質を服用しだして、1～2日くらいは、感染力があるので、学校や園は休む必要があります。1～2日間が過ぎ、発熱、食欲不振などなければ、抗生物質を服用しながら、登園、登校可能です。

この病気の問題は、熱などが下がってから、腎臓が悪くなってくることが少なくないことです。大体、かかってから2週間くらいで急性糸球体腎炎になることがあります。その他の合併症としては、リウマチ熱、中耳炎、副鼻腔炎、肺炎、敗血症などがあります。

最近では診断と治療がきちんとされ、その他の合併症はあまり見られません。

ただ、急性糸球体腎炎は最近でも起こりうるので、治ってから一度は尿の検査をしておく必要があります。

水痘、麻疹などのウィルス感染症は1回かかると免疫ができ、それ以後は感染しなくなります。溶連菌感染症は1回の感染で免疫ができる人と、数回かからないと免疫ができない人がいるようです。そのため、何度も溶連菌感染症にかかる人もあります。

